

【Part1】災害文化とは～見て、聴いて、知って

防災教育の充実を求めて

—「暴れ狂った海」訴え続けて 26 年—

熊谷 励

今回の東日本大震災は千年に一度と言われる大規模なもので、東北地方に甚大な被害をもたらし、全国で死者や行方不明者が2万人を超える事態に陥った。特に、岩手県や宮城県では壊滅的な被害を受けた自治体が多く、復旧や復興がかなり厳しい状況にあった。

被災後にかつての勤務地や教え子たちの住まいを訪ねたが、無残にも跡形がなく、ここはどこかの道路でこの場所はどこだったのかと、さまようばかりであった。また、強固に造られた防潮堤や防波堤も見影がなく、津波の恐ろしさをまざまざと見せつけられた。そして、お世話になった方々や知人などの死亡や行方不明を知り、愕然としたことが昨日のように思い出される。退職後は学校訪問の仕事の中で、犠牲になった子どもや親を失った子どもの話を聞き、津波に対する防災教育の重要性を再確認し、さらなる推進の決意を新たにした。

津波防災への取り組み

私が防災教育に取り組んだ理由は、両親からの語り継ぎであり、その地域の歴史である。

最初に取り組んだのは、明治三陸大津波から100年目を迎えた1996年（平成8年）である。教頭として在職していた三陸町立越喜来小学校は海の近くに位置しており、明治と昭和の津波で甚大な被害を受けていた。そこで、全校児童と保護者を対象に、昭和の三陸大津波時代の学校近辺の住居等を復元し、明治と昭和の三陸大津波の被災状況等の学習会を開催した。1933年（昭和8年）の津波を経験した古老に体験も話してもらい、明治の大津波パネルを体育館いっぱいに展示するな

ど、津波による悲惨な状況を再現した。また、4年生と一緒に学区内を実際に歩き、津波の被害状況や遡上場所などを調べ、津波の恐ろしさや命の大切さを学んだ。

翌年は安全マップを作成し、全校児童の家の場所や通学路などを書き込み、登下校時の避難場所や経路などを確認した。また、いつでも避難場所を確認できるよう各教室や廊下に掲示した。さらには、地区懇談会に参加している保護者に対して、安全マップを活用して防災意識の高揚にも努めた。

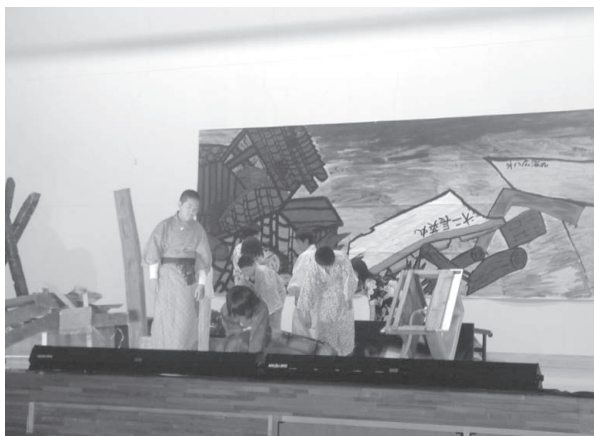
教員生活最後の2006年度（平成18年度）に着任した母校の大船渡市立綾里小学校では、津波防災劇「暴れ狂った海」に取り組んだ。この地区は明治の津波で遡上高38.2mの国内最高を記録し、人口の過半数である1269名の犠牲者を出し、児童の犠牲も151名を数えた歴史がある。

2003年（平成15年）に国の地震調査研究推進本部が、宮城県沖地震について『10年以内の発生確率が39%、20年以内88%、30年以内には99%』と発表している。それにもかかわらず、津波の注意報や警報が発令されても避難する児童は10%未満で、津波浸水想定区域の住民は皆無に等しかった。そこで、次のようなねらいで津波防災劇に取り組んだ。

- 1 本学区は、明治と昭和の津波で壊滅的な被害を受けた地域であることを理解するとともに、それを風化させない態度を養う。
- 2 津波に関する劇を演じることによって、津波の恐ろしさを身をもって体験し、自分の命は自分で守る態度を養う。

3 劇を方言で演じることによって、祖父母とのコミュニケーションを図り、後世に津波の恐ろしさを伝える態度を養うとともに、地域の防災意識の高揚に努める。

「暴れ狂った海」の脚本は、私自身が父母から語り継がれた祖父(明治三陸大津波の震災孤児)の体験をもとに、「津波の恐ろしさ」「命の大切さ」「悲しみや生活困窮」「復興」をキーワードに作成したものである。劇は4場面からなり、6年生全員が秋の学習発表会で地域住民に披露した。また、主題歌も作詞・作曲して、劇の終了後に子どもたちが歌った。



その他にも、次のような取り組みを行ってきた。

- ① 全校児童を対象にした「我が家の安全マップと約束」づくり
- ② 登下校時や在校時の避難訓練と昭和の津波体験談
- ③ 明治と昭和の大津波被害状況資料の全戸(863戸)配布
- ④ 三陸沿岸を襲った過去の津波状況資料の全戸配布
- ⑤ 津波防災看板(明治と昭和の大津波被害状況と避難所)の設置(綾里駅前と小学校体育館前)
- ⑥ 「暴れ狂った海」の劇をDVD化し、演じた子どもたちや関係機関に配布



津波防災教育への反響

こうした津波防災教育の取り組みは、全国の防災誌や方言の事典などにもとりあげられるようになった。2011年度(平成23年度)から県内全域で使われている教科書「小学校社会5年下」には、現在も掲載されている。また、国内外の防災関係者の視察を受けたり、全国の新聞やテレビなどで報道されたりもした。さらには、防災教育チャレンジプランでは「防災教育特別賞」、全国海岸協会からは「海岸功労者」として高い評価を頂いた。退職後は、「海のフェスティバル」や「津波防災推進フォーラム」などに出演し、「暴れ狂った海」を上演してきた。また、他市町村の小・中学校でも、脚本やDVDを参考に上演されるようになってきている。

津波災害への備え

今回の東日本大震災では大船渡市の被災戸数が他の市町村と大きな差異はないのに、犠牲者が極端に少なかった。これは、住民の避難意識などのソフト面が大きかったのではないかと推察される。手前味噌になるが、「暴れ狂った海」を繰り返し上演してきたことや、それが各局のテレビや地元の新聞紙上に掲載されたことも、住民の意識を動かしてきたのではないだろうか。

退職後は、釜石教育事務所や沿岸南部教育事務所、釜石市教育委員会に所属し、学校訪問のたびに震災遺児・孤児の実態把握に努めた。そして、「暴れ狂った海」の脚本も、東京のインターナショナルスクール在職教員の協力を得て英文化することができた。

また、「暴れ狂った海」一被災状況とその教訓

一をタイトルに、①東日本大震災の被害状況②過去の津波で甚大な被害を受けた地域③津波に対する課題④津波防災の四部構成で、県内外に出向いて《風化防止》の活動にも力をいれている。

最後に、これからの防災教育で心掛けて欲しいことは次の点である。

防災教育の推進で重要なことは、自分の判断で身の安全を守る「自助の力」と、地域の人達と助け合う「共助の力」を育成するため、各学校は家庭や地域と連携しながら進めることである。

- ①地震と津波はセットで考えるべきである。
- ②常に避難場所を考えておく。
- ③遠い場所より近くの高台に避難する。

④川のそばほど危険である。

⑤何も持たずにすぐ避難する。

⑥避難したら戻らない。

⑦車で逃げないで自分の足で逃げる。

⑧自分の想定で行動しない。

⑨第一次避難所で点呼しない。(高台へ避難してから点呼)

⑩子どもを保護者が迎えに来ても、警報や注意報が解除されるまで引き渡さない。

⑪住居や公共施設は高台に建てる。

(大船渡市立綾里地区公民館長)